井上貴子著
『近代インドにおける音楽学と芸能の変容』
青弓社　2006年　739ページ

小尾　淳

どの世界でも栄枯盛衰は必須の理であり、芸能の世界でもまた然りである。物理的に「モノ」として残らない芸能の変容を研究することは困難を極める。それにもかかわらずこれを研究対象に選んだ理由を、著者は次のように述べている。

「本書は、筆者が長年の研究において抱いた芸能の存続と衰退に関する疑問—「なぜある芸能はますます隆盛を極め、またあるものは存続の危機にさらされるのか」—という本質的な問いを明らかにしようとする試みである。」［井上　2006：19］。

著者は検証するにあたってインドの事例を選んだが、それは単純に著者の専門地域だからと言うわけではなく、「近代ヨーロッパ帝国主義」の象徴ともいえる英領インド、そのインド音楽学がヨーロッパで最も初期の非ヨーロッパ音楽に関する研究論文のひとつだからであると述べている。

インド音楽というものは、単なる娯楽と認識されているかもしれない。しかし、周知のように、インドでは州によって様々な言語が話されているため、その言語を歌詞に使った音楽は娯楽の要素を超えて、国民のプロパガンダに有効であることから、政治と密接に関わっている。更に、インドは英領以前からイスラームの侵攻や藩王（マハーラージャ）の興亡などにより、国民は多言語社会に生きることを余儀なくされ、芸能を庇護する統治者の母語によって地域芸能の発達に変容が見られるようになった。

本書では音楽学にとどまらず、それが成立してきた社会的背景や、インド人によるカースト研究などに関しても非常に細部にわたって解説してあるため、インド史を学ぶ者にとっても必読の書と言える。なお、ここで取り上げられる音楽はインド古典音楽で、それは大きく北のヒンドゥスターニー音楽と南のカルナータカ音楽に分けられることも知っておくと理解しやすいだろう。

本書は大きく第1部と第2部に分けられ、第1部では18世紀以降、インドが植民地化される過程で、ヨーロッパの思想や文化がインド人知識人に影響を及ぼし、それに伴って、芸能や美術などがいかに変容していったのかを追う。そしてヨーロッパの音楽学の影響を受けながらインドの音楽学が成立する過程に注目する。第2部ではこのようにして成立したインドの音楽学が実際の芸能に及ぼす影響について検討している。

第1部は第1章から第4章までである。第1章は「東洋学の時代－18世紀末－19世紀末」と題して、インド音楽研究の萌芽ともいえる時代に、学術的な貢献をなした数人の人物に注目している。英領インドに居住したイギリス人の目を通したインド音楽観、当時の音楽シーンがどのようであったかを知ることができる。東洋学者として最初にインド音楽に関

する学術論文を発表し、当時の植民地支配者のインド認識に多大な影響を与えたベンガル・アジア協会の創設者のウィリアム・ジョーンズ (1746-94) を取り上げている。彼はインド音楽を語る上で不可欠な要素「ラーガ」を「旋法」と解し、フィールドワークのさきがけとも言える方法で西洋人の目から見たラーガの概念を解読しようと試みる。しかし科学的分析の術がない時代であり、インドとギリシャの神々の比較をラーガの体系にも当てはめようとするあたりは、印象論の感が否めない。次にインド知識人による初期の音楽研究者である S.M. タゴール (1840-1914) に焦点をあてる。インド人自身が英語で音楽に関する論考を記すまでに、ジョーンズの時代から実に 1 世紀が経っているのは注目に値する。そしてプネー・ボンベイ・マドラスを拠点とした最も初期の音楽協会のひとつ、ガーヤン・サマージに関わる音楽研究家や音楽家を取り上げ、さらに、西洋音楽とインド音楽の出会いにも言及している。18 世紀ごろからインドにもたらされた西洋音楽は、主に軍楽隊とキリスト教音楽であった。その影響を受けたタミル人キリスト教徒チンナスワーミ・ムダリヤール (1813-1901?) を取り上げる。彼の貢献は大きく、カルナータカ音楽（南インド古典音楽）を五線譜にしてヨーロッパ人に広めることを試み、今まで記譜が軽視されてきたインド伝統音楽の印刷と出版の重要性を訴えた。ここまで簡単に第1章を概観してきたが、内容は音楽学のみならず、はるかに膨大で生き生きとした、英領下インド史の知識をも読者にもたらしてくれる。

第 2 章は「比較音楽の時代－19 世紀末－20 世紀中葉」と題し、世界のさまざまな音楽に用いられる音律学の比較検証を容易にする「セント法」を編み出した、エリス以降のイギリス人によるインド音楽研究とその影響を受けたインド人の論考を主に取り上げている。第 1 章で論じられた東洋学者による音楽研究では、先述のようにしばしばインドとギリシャが比較されたが、その内容は印象論の域を出ないものであった。比較音楽学の時代には、蓄音機及び録音技術の画期的な発明により、音楽研究は飛躍的な進展を遂げる。簡単にフィールドに赴くことが出来ない時代には、文献に頼ることが多かったが、容易に諸外国の音楽を部屋にいながらにして、再生できるようになったのである。そして前出の S.M. タゴールやエリスと交流のあった C.R. デイ（1860-1900）を最初に取り上げる。彼はカルナータカ音楽の研究をし、いち早くセント法も論考に応用した。そして民族音楽学者のさきがけとして、膨大なフィールドワークを行って現地の音楽を収集したフォックス・ストラングウェイズ (1859-1948) を取り上げている。これらの代表的なヨーロッパ人研究者について論じた後、インドにおいて重要な役割を果たした 2 人の人物、V.N. バートカンデーと V.D. パルスカルについて言及する。2 人はいち早く英語の教育を受け、官僚や法律家、教育者などの職に進出し、民族運動や改革運動に指導的役割を果たす人物を多数輩出した、チットパーワンというバラモンのサブ・カーストに属する。前者はヒンドゥスターニー音楽の理論的体系を構築し、後者は教育の発展に貢献した。それに続いて、タミル音楽の再興と音楽史の再構築に貢献し、またタミル古典文学に置ける音楽の研究でも第一人者でもあった、タミルキリスト教徒のアブラハム・パンディタルの功績を取り上げる。彼の家族は医術や音楽に優れているが、もとは非常に低カーストであったナーダールというカーストに属していた。ナーダールが

いかに地位向上を図ったかも興味深く書かれている。このように1音楽研究者の背景の様々な社会問題やカースト問題についても詳細に渡って解説されているので、読者は引き込まれることだろう。第 2 章の最後では、南北統一の理論の構築を目指し、試行錯誤が行われた全インド音楽会議に焦点があてられる。

第 3 章は「南インドの音楽学－民族音楽学の時代へ」と題して、1930 年前後から 50 年代にかけての動きを、特に南インドを中心に検討している。前章の全インド音楽会議は北インドよりであったが、1927 年に、南インドの都市マドラスにおいても全インド音楽会議が開催される。さらにマドラス音楽アカデミーの活動を取り上げ、今日の南インド古典音楽シーンの重要な土台が築き上げられていく様子を詳細に知ることが出来る。北のアーリヤ人とは別のドラヴィタ民族のアイデンティティを掲げ、タミル音楽会議を通して発展したタミル音楽運動が取り上げられる。次に、現在の南インドにおける音楽学の方向性を決定付けた 2 人の音楽学者、サンバムールティとラーガヴァンを取り上げている。前者はインド音楽教育に多大な貢献をし、後者はインド学としての芸能研究を行ったが、両者とも西洋から見た東洋学、比較音楽学の研究に影響を受けながらも、もはや西洋とは比較しない「インド人のための」研究を行ったことに、著者は西洋自身の存立のための東洋であることをやめ、自らによる自らのための自己理解を確立すること、すなわち「他者認識に対抗する自己認識」への移行と捉えることができると分析する。この章の最後は、第 1 章から第 3 章まで検討してきたヨーロッパの音楽学が、インド音楽の何に注目し、それがどのように再解釈されたのかをまとめて論じている。

第 4 章は「独立後の文化政策」と題して、中央政府とタミルナードゥ州政府の文化政策を、関連機関の活動を通して考える。1947 年英領インドはインドとパキスタンに分離独立した。中央に関しては、1950 年代に設立された音楽演劇研究所をはじめとする関連機関を取り上げる。タミルナードゥー州に関してはタミルナードゥ音楽演劇協会などの活動や、60 年代にドラヴィダ運動から生まれた地域政党が州政権を担うようになって以来、徐々に強化されていったタミル至上主義的な文化政策の流れを追いつつ、特に 80 年代以降のタミル語信仰・文化部の創設に伴う諸機関の再編を取り上げて、その特徴を検討する。最終的に中央政府の文化政策の根幹にある「多様性のなかの統一」という理念と、タミルナードゥ州政府の「タミル至上主義」との間の齟齬を検討し、音楽学と文化政策の関係を、特に「芸術至上主義」のイデオロギーが文化政策に対してどのように作用しているかに注目しながら明らかにする。

第 2 部は第 5 章から第 7 章までである。そのほとんどは著者がフィールドワークで独自に収集したさまざまな形態の資料に基づいて論じることになる。著者と同じ文脈でこれらの芸能について取り上げた先行研究は皆無に等しい。

第 5 章は「タンジャーウール芸能史」と題して、チョーラ朝の首都であり、タミル語文化の中心地であったタンジャーヴールに、いかにしてテルグ語文化が反映するに至ったかを、チョーラ朝の滅亡後、特にナーヤカ、マラーターの 2 つの外来の王朝の興亡と宮廷による芸能の保護・育成、バラモンの移住と宮廷が彼らに与えた庇護、ティヤーガラージャ・アーラーダナーとバーガヴァタ・メーラの背景となる宗教思想としてのヴィシュヌ派信仰

の流れなどを通じて概観する。特に芸能分野に貢献したパトロンについても言及し、これによって植民地時代以前の芸能の担い手とパトロンの関係や、第2部で取り上げる実際の芸能がどのような社会状況で成立発展を遂げたのかを明らかにする。さらに、第1部で論じられた、新しい音楽学によって再解釈された古典音楽や舞踊の基本理論を具体的に検討し、文化の交差点としてのタンジャーウールの地位的重要性について論じる。

第6章では、南インドを代表する楽聖であるティヤーガラージャのアーラーダナー（慰霊祭）を取り上げる。ティヤーガラージャは早くから「インドのベートーヴェン」などと西洋に紹介され、その曲は南インドを中心に大変な人気を誇る。100年以上の歴史を持つアーラーダナーは国内外での影響力が強く、外国からの参加者も珍しくない。しかしこれを扱った研究はまだない。著者はまず、20世紀初頭から盛んになったティヤーガラージャ研究の内容を説明し、ティヤーガラージャの生涯を概観した後、彼の弟子たちがいかにしてその作品を受け継ぎ、広めていったのかを、親族間の伝承に加えて、一般に「三大師弟伝承」と称される伝承、ティヤーガラージャの生涯について書き記し、大量のマニュスクリプトを保存するワーラージャーペート、著名音楽家を輩出し、ティヤーガラージャ作品の流布に貢献の大きいウマイヤールプラム、アーラーダナーの発展に貢献したティッライスターナムの各村の弟子の伝承について詳述する。次に、ティヤーガラージャがなぜ音楽家や音楽愛好家の間で「神聖視」されるようになったのかを、逸話や伝記、音楽家個人に焦点をあてた研究などの側面から考察する。著者は、特にティヤーガラージャのアーラーダナーが彼のカリスマ性をさらに高めたものと考え、アーラーダナーの歴史について論じ、どのような過程を経て現在のような形になったかを明らかにする。特に、ティッライスターナムの弟子たちとナーガラトナーンマールのアーラーダナーの発展に対する貢献に関しては詳細に取り上げ、アーラーダナーをめぐる派閥闘争とその意味を探る。ナーガラトナーンマールは女性がまだ舞台に上がることを認められていない時代に「民主的」なアーラーダナーを提唱したパイオニアである。著者はティヤーガラージャ・アーラーダナーの「民主化」は女性の参加において著しく促進されたことに注目する。

第7章では、ナラシンハ信仰（ヴィシュヌ神の化身のひとつ）に密接に関わっている芸能であるバーガヴァタ・メーラを取り上げる。これは今日でもバラモン男性によるテルグ語舞踊劇であるという特殊性を維持しており、「民主化」とは無縁である。一般にバラタナーティヤムやクーチプーディのような「民主化」された芸能とは大きく異なり、存続が難しい点に著者は注目する。まずはこの舞踊劇が一般にどのように紹介されてきたかを概観し、伝承の衰退が広く共有された認識であることを明らかにする。そしてこれを伝承してきた3つの村メラットゥール、サーリヤマンガラム、テーペルマーナッルールの各村の伝承と上演状況について詳述し、現在は伝承の途絶えてしまった村についても概観する。最後に、バーガヴァタ・メーラと関連する芸能を取り上げ、その伝承状況を比較検討する。著者は、バーガヴァタ・メーラの衰退の要因をタミルナードゥ州政府の文化政策と芸術至上主義的な価値観の一般化に求め、インドの芸能が存続する上で、担い手が「芸術」と「バクティ（信仰心）」という論争の狭間で苦慮する様を詳細に分析する。

ここまでざっと全体の内容を概観してきたが、著者が本書を書くにあたって特に注目したキーワードは「芸術」「科学」「民主化」であるという。東洋学者が過去の文献と現実の音楽を単純に結びつけたのに対し、比較音楽学者が科学的方法を用いて、インド音楽に対する「憧憬のまなざし」を排除したこと、ヨーロッパの音楽学の影響を受けて成立したインド音楽研究のあり方とその音楽観、それらが実際の芸能に及ぼした影響についてまとめ、今日のインド社会で芸能が存続あるいは発展するために、重要な要素とは何かを明らかにしている。また、芸能の担い手たちが、自身を正当な伝承者であるというアイデンティティを芸能に求めることに注目し、「芸術至上主義」だけでは調停できないインド芸能の側面を浮き彫りにする。さらに、独立インドの「多様性」に対する配慮の不十分さを指摘し、「統一」は「多様性」を抑圧し、その結果「多様性」の側からの主張の声が高まると論じている。

インドにおいて「芸術」は「バクティ(信仰心)」と切っても切れない関係にある。目まぐるしく変化する世界に上手く順応した芸能、存続が危うい芸能を取り上げ、分析する本書を読むことによってインド芸能の将来的なあり方が見えてくることだろう。現在南インドにおける古典音楽シーンは非常に活気があり、音楽愛好家のみならず多くの観光客を集めているが、常に「芸術」と「バクティ」の狭間で揺れ動いている芸能の担い手がいることを知っておくと、また違った視点からインド音楽を理解できるかもしれない。本書は、近代インドにおいてどのようなアプローチで音楽が研究されてきたのかを、年代順にまとめている貴重な書であり、著者が 20 年以上にわたる研究を経てまとめた集大成と言っても過言ではない。インドにおける音楽学と芸能に焦点を当てているが、扱っている範囲はきわめて広く、インドに関する知識及び歴史を知る上でも非常に有効である。繰り返しになるが、インド音楽は単なる娯楽ではなく、複雑な要素が絡み合った芸術であることを改めて認識させる貴重な一冊である。